

人、音楽、自然——日本フィルのテーマです。

JAPAN
PHILHARMONIC
ORCHESTRA

—— 創立指揮者 渡邊曉雄 ——

JAPAN PHILHARMONIC ORCHESTRA

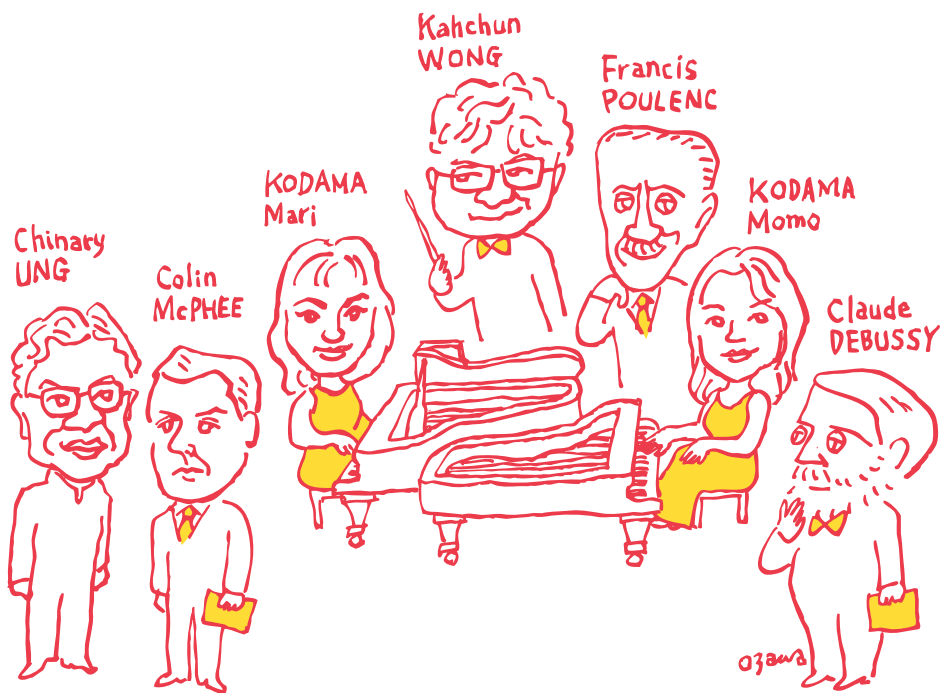
SUBSCRIPTION CONCERTS

2024

1

JAN

第 757 回
東京定期演奏会



サントリーホール
2024年1月26日(金) 19:00
1月27日(土) 14:00

日本フィルハーモニー交響楽団



©Marco Borggreve

Piano

ピアノ

児玉 桃

KODAMA Momo

J.S.バッハからメシアンを含む現代作品まで、幅広いレパートリーと豊かな表現力で活躍を続ける国際派。幼少の頃よりヨーロッパで育ち、パリ国立高等音楽院に学ぶ。1991年、ミュンヘン国際コンクールに最年少で最高位に輝く。

その後、ケント・ナガノ指揮ベルリン・フィル、小澤征爾指揮ボストン響、モントリオール響、ベルリン・ドイツ響、北ドイツ放送交響楽団との共演、デュトワ指揮NHK交響楽団とのアジアツアーのソリストを務めるなど着実に世界的なキャリアを築く。

2008年は、メシアン生誕100年を記念したシリーズ公演(全5回)を行い高い評価を得た。2013年にはルツェルン音楽祭、ウィグモアホール、東京オペラシティ文化財団の共同委嘱による「細川俊夫：練習曲集」をルツェルン音楽祭にて世界初演、12月には東京オペラシティにて日本初演、翌年ロンドン・ウィグモアホールでも演奏。

最近の活動としては、ウィーン・ムジークフェラインへのデビュー(メルクル指揮ウィーン・トーンキュンストラー管)、ノリントン指揮フランス放送フィル、フォスター指揮パリ室内管弦楽団との共演をはじめ、室内楽では、ベルリン・コンツェルトハウスで

の室内楽など、ヨーロッパでも活躍の幅を広げている。

CDはオクタビア・レコードより『ドビュッシー：impressions』、『ショパン・ピアノ作品集』『メシアン：幼子イエスに注ぐ20のまなざし』がリリースされており、ヨーロッパでも高い評価を得ている。2010年1月にはメシアンの『鳥のカタログ』全集をリリース。ECMよりリリースされたCD『鐘の谷〜ラヴェル、武満、メシアン：ピアノ作品集』は、ニューヨーク・タイムズ、サンフランシスコ・クロニクル、ル・モンド・ド・ラ・ムジーク、仏クラシカ・マガジン、テレマ等で大絶賛を博し、2017年にはECM第2弾、『点と線・ドビュッシー&細川俊夫：練習曲集』をリリース。さらに、ペンタトーンより、姉の児玉麻里との連弾によるチャイコフスキー3大バレエ抜粋をリリースしている。2021年3月、ECM第3弾となる『細川俊夫：月夜の蓮 - モーツァルトへのオマージュ、モーツァルト：ピアノ協奏曲第23番』をリリース、大きな話題を呼んだ。

2009年中島健蔵音楽賞および芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。

カールスルーエ音楽大学(ドイツ)教授。パリ在住。

プログラム・ノート 解説：山野 雄大

■ チナリー・ウン：《グランド・スパイラル：砂漠の花々が咲く》
——オーケストラのための

本日のコンサート、珍しい選曲には〈アジアと西洋音楽の出会い〉というテーマが強く響いている。はじめにお聴きいただくのは、アジアの美学と西洋現代音楽の技法を見事に融合させた音楽として、もっと知られてほしい秀作だ。

チナリー・ウン(1942~)は、カンボジア生まれのアメリカ人作曲家。クラリネットを学んだのち、1964年に奨学金を得てアメリカへ。作曲に転向し、周文中(チョウ・ウェンチュン/鬼才ヴァレーズに師事した中国出身の現代作曲家)に学んで博士号を取得する。

ところが、故国で内戦が始まり、共産党政権によるホロコーストがおこなわれた。この時代、在米だったウンの作曲活動はぴたりと止まる。ウンは難民の支援に取り組みながら、カンボジアの文化を守るべく独学で故国の楽器や音楽を学び直し、アンサンブルを結成して何百もの演奏会をおこない、歴史的録音を保存する活動を展開し……と、文化の抹殺に抗する活動に没頭した。

広くアジア音楽にも研究を深めたウンは、80年代に作曲家としての活動に復帰してからも、その成果を自身の音楽へ深く自在に反映させる。「東洋が黄色、西洋が青なら、私の音楽は緑だ」と語る

ウンは、ユニークな作品を数々発表。オーケストラ曲《内なる声たち》(1986年)でグロマイヤー作曲賞を受賞するなど高く評価されたウンは、〈スパイラル(螺旋)〉と題された独奏曲・室内楽曲のシリーズ(1987年~)など新たな音世界を切り拓いている。

〈スパイラル〉シリーズは、前のパッセージが別の方法で再表現されて新しいフレーズを作り続ける、それこそ螺旋のように繋がりつつ変化してゆくコンセプトが軸となっている。作曲家いわく、螺旋のプロセスはフレーズの連続を伸ばすだけでなく、音の〈スピノフ〉のエネルギーも生む……とのことだが、この独特の時間感覚は、後ほどお聴きいただくドビュッシー《海》と比べると大変に面白い。

ウンは1990年に吹奏楽のための《グランド・スパイラル》を作曲。これを管弦楽曲に書き直したのが、本日の《グランド・スパイラル：砂漠の花々が咲く》(1991年)だ。精巧な装飾と豊かなニュアンスに満ちたヴォーカルを彷彿させる旋律線、豊穣な音色とその頻繁な変化など、劇的ながら澄んで多彩な響きが素晴らしい。作曲家いわく「インスピレーションの源は、陽光をプリズムのように

反射しながら絶えず回転している、半透明の彫刻のイメージ」だったという。

いつけん捉えがたいけれど、直感的にその何か大きなものが強く立ち上がってくる本作、オーケストラ編作にあたって付け加えられた《砂漠の花々が咲く》というタイトルの意味は、音楽が教えてくれるだろう。

■ プーランク：2台のピアノのための協奏曲 二短調

富裕な実業家の息子としてパリのど真ん中に生まれたフランシス・プーランク(1899～1963)は、幼い頃から豊かな文化を呼吸して育ったひと。彼の音楽は、鋭いセンスと豊かな色彩感、ときに辛辣なウィットを閃かせながら、透明感と豊かな旋律の魅力を忘れることはない。

1932年に書かれた本作は、2台のピアノがそれぞれ人格も異なる様子で繰り広げる対話も魅力的で、プーランクの愛した様々な音楽の要素も、オマージュの花束のように薫り響いている。彼は作曲にあたって、彼が幼少期から最も愛した作曲家であるモーツァルトをはじめ、リストの作品、同時代の優れた作曲家・指揮者マルケヴィチの〈パルティータ〉を研究。さらに同年1月に初演されたばかりのラヴェル〈ピアノ協奏曲ト長調〉にすっかり魅了され……そうした諸作からの影響が、この曲にちりばめられているのだ。

急・緩・急と3つの楽章は、様々な要素が自由自在に(生き生きと!)飛び交う、明るい幻想曲風の音楽だ。第1楽章〔アレグロ・マ・ノン・トロppo〕から、いつけん古典的な形式だが、脱線したり変身したり……なに

楽器編成:ピッコロ1、フルート2、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン持替1)、クラリネット3(E♭管クラリネット持替1、バス・クラリネット持替1)、ファゴット2、コントラ・ファゴット1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン2、バス・トロンボーン1、テューバ1、ティンパニ、大太鼓、シンバル、ボンゴ、コンガ、ヴィブラフォン、ベル・ツリ、マリンバ、クラベス、チューブラーベル、銅鑼、トムトム、アンティーク・シンバル、シズル・シンバル、ウッドブロック、タンブリン、ウインド・ゴング、テンプル・ブロック、ティンパレス、タイ・ゴング、ハーブ、ピアノ、弦楽5部。

しろ楽しい。驚かされるのは楽章の最後。雰囲気が一転して、バリ島のガムラン音楽に触発された音楽が夢うつつの狭間を漂うように奏されるのだ。——これは、1931年にパリで開催された植民地博覧会(再現された巨大なアンコール・ワット[フランス植民地だったカンボジアの寺院]がライトアップされたり、各植民地のパヴィリオンが異国情緒をかきたてた)で、バリ島から来たガムランの演奏を聴いた印象が、プーランク独自の音楽言語に取り込まれている。第2楽章〔ラルゲット〕は、モーツァルトへのオマージュ(見事な模倣!)から、近現代風の味わいへ変化してゆくさまも魅力的だ。最後の第3楽章〔アレグロ・モルト〕は対照的に勢い溢れるトッカータ風の音楽が走り出す。ストラヴィンスキーやガーシュウィンも思わせる響き、はたまたガムラン風とこれまた変幻自在、このうえない遊び心で勢いよく駆け抜ける。

楽器編成:独奏ピアノ2、ピッコロ1、フルート1、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替1)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、テューバ1、スネア・ドラム、ミリタリー・ドラム、ピッコロ・スネアドラム、トライアングル、カスターネット、シンバル、大太鼓、弦楽5部。

■ コリン・マクフィー：《タブー・タブーアン》

——オーケストラと2台のピアノのためのトッカータ

西洋の作曲家たちが〈東洋〉に惹かれた歴史は古いが、特に19世紀後半のフランスでは数々の作曲家が民族音楽に特徴的なペンタトニック(五音音階)や東洋の旋法を用いるなど、異国情緒を醸し出した作品を書いている。たとえば1889年、パリ万国博覧会を見物しに出かけた作曲家ドビュッシーは、ジャワ島のガムラン演奏と舞踊から強烈な印象を受け、それ以降の作品のあちこちに東方由来の要素を(も)織り交ぜてゆくようになった。しかし、彼が(後のプーランクと同じく)影響を直接に採り入れるのではなく、既に彼自身のなかにあった語法を強化するように用いたのに対し、バリ島のガムラン音楽へより近く飛び込んでいった作曲家もいた。それがコリン・マクフィー(1900～1964)だ。

マクフィーはカナダのモントリオール生まれ。パリ留学ののちニューヨークで活動を始めたところで、当時SPレコードで発売されたバリ島の音楽を聴いて、その未知の響きに取り憑かれる。1931年からはバリ島に滞在、ガムランを訪ね歩きながら作曲家・民族音楽研究家として盛んな活動を展開した。

そもそも西洋音階と異なる音階・音程をもって、複雑に重なり合う中から生まれる、独特の時間と音宇宙——ガムラン音楽に魅せられたマクフィーは、何十ものガムラン音楽を(西洋音楽の音階と記譜法で)採譜・編曲しただけでなく、それ

らの素材を生かしたオーケストラ作品《〈タブー・タブーアン〉——オーケストラと2台のピアノのためのトッカータ》(1936年)を作曲する。

作曲家いわく、タイトルは〈打楽器を叩く槌〉やく〈ビート〉を意味するバリの言葉に由来するそうで「本質的に打楽器的な音楽を意味する」とのこと。まず〈核ガムラン〉と呼ぶ楽器セット[=2台のピアノ、チェレスタ、木琴、マリンバ、鉄琴]がオーケストラの核に据えられ、ガムランの太鼓やゴングも様々な楽器で模されるなか、「バリ音楽のシンクペーションのリズムの多くは、ラテンアメリカのポピュラー音楽やアメリカのジャズと密接な親和性を持って」いると感じたあたりも自在に反映されているのが面白い。

構成は西洋音楽的。急・緩・急の全3楽章から成り、第1楽章《オスティナート》(=一定の音型を繰り返す)に続いて、マクフィーがバリ島で聴いたメロディをフルート独奏が奏して始まる第2楽章《ノクターン(夜想曲)》、そして第3楽章《フィナーレ》の昂揚へ。

マクフィーについては、自身の回想録であるコリン・マクフィー／大竹昭子訳『熱帯の旅人 バリ島音楽紀行』[河出書房新社／1990年]のほか、彼を軸にその影響圏を広い視野で捉えた小沼純一『魅せられた身体 旅する音楽家コリン・マクフィーとその時代』[青土社／2007年]が知的昂奮に満ちた必読書。Mervyn

Cooke "Britten and the Far East" [The Boydell Press / The Britten-Pears Library, 1998]にもマクフィー、プーランク作品に触れた論者があるので、ご興味あるかたは参照されたい。

■ ドビュッシー:《海》——オーケストラのための3つの交響的素描

煌めきから陰翳まで繊細夢幻に薫りたつ色彩を、聴覚の喜びへと自在に響かせていったひと……伝統にとらわれず、型破りな才能で未知の海原を拓いていったクロード＝アシル・ドビュッシー(1862～1918)の音楽には、多種多様な音楽文化からの影響も溶け込んでいる。傑作《海》——オーケストラのための3つの交響的素描(1903～05年)でも、長調・短調の響きより、古くからある様々な旋法の色あいや、ペンタトニック(東洋をはじめ各地の民謡にも用いられる5音音階)などを積極的に生かしながら、多彩なハーモニーがゆらめき、波うち、煌めきのしづきをあげる。

副題に〈エスキス(素描)〉とあるが、心の内なる印象、記憶の襞から沸きあがってくる感覚が、音となって響きさまく3章は、実際の海の情景をそれらしく表現するわけではない。むしろ、繊細に磨き込まれた音と響きのニュアンスとその集積から、多彩で膨大なイメージが広がってゆく時間のうねり、常に変化し続ける〈音の海〉を生きる体験……と言ったほうが近いかも知れない。

3つの楽章には、それぞれ詩的なタイトルがついているけれど、具体的な風景を喚起するものではない。——**第1楽章《海**

楽器編成:独奏ピアノ2、ピッコロ2、フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット2、コントラ・ファゴット1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン2、バス・トロンボーン1、チューバ1、大太鼓、シンバル、トライアングル、銅鑼、バリニーズ・ゴング、シロフォン、サンドペーパー・ブロック、マリンバ、グロッケンシュピール、バリニーズ・シンバル、チューブラーベル、ハープ1、チェレスタ、弦楽5部。

夜明けから正午まで》であられるモティーフや旋律は、よく聴いてみるとそれぞれ深い繋がりを持っていることが多く、次々に現れる新しい動機も自然に、波のうねりが変わってもすべて同じ大きな海であるように、感じられるだろう。途中、チェロの総奏を4声部に分けた厚い響きで歌うように指示された主題など、サウンドの豊かな色づかいも印象的。**第2楽章《波の戯れ》**は雰囲気をごくと変えて、絶え間なく変転する音響、即興のようにも思える時間と色彩の戯れ……。最後の**第3楽章《風と海の対話》**は、遠く低い轟きの中から、低弦にあらわれるリズムの特徴的な動機、対照的に拍節感なく(しかし鋭い)メロディ、そしてトランペットが第1楽章の旋律を再び(焦り気味に)奏し……と、様々な要素が緊張感と共にぶつかり現れる。そこから先行楽章の動機もたびたび回想されながら、常に変化しつつ巨大なクライマックスへ盛り上がってゆくさまは、オーケストラを駆使しきった〈音の海〉の凄味を堪能させてくれるだろう。

楽器編成:ピッコロ1、フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、ファゴット3、コントラ・ファゴット1、ホルン4、ホルネット2、トランペット3、トロンボーン2、バス・トロンボーン1、チューバ1、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、銅鑼、ハープ2、グロッケンシュピール、弦楽5部。



これからの
カーチュン・ウォン演奏会

第760回東京定期演奏会

サントリーホール

2024年 5月10日(金) 19:00 開演 11日(土) 14:00 開演

マーラー:交響曲第9番

1回券料金 S ¥8,000 A ¥6,500 B ¥6,000 C 完売 P ¥4,000 Ys(25歳以下)¥1,500

好評発売中

特別演奏会

昭和女子大学人見記念講堂

2024年 5月25日(土) 14:00 開演

第404回名曲コンサート

サントリーホール

2024年 5月26日(日) 14:00 開演

ピアノ:小菅 優
ラフマニノフ:ピアノ協奏曲第2番
チャイコフスキー:交響曲第5番



©Takehiro Goto

2024年
2月14日(水)
発売

5/25 1回券料金 S ¥6,000 A ¥4,500 B ¥3,500 Gs(65歳以上)¥3,500 Ys(25歳以下)¥1,500

5/26 1回券料金 S ¥8,000 A ¥6,500 B ¥6,000 C ¥5,000 P ¥4,000
Gs(65歳以上)¥5,000 Ys(25歳以下)¥1,500

第255回芸劇シリーズ

東京芸術劇場

2024年 6月2日(日) 14:00 開演

坂本龍一:地中海のテーマ(1992年バルセロナオリンピック開会式用音楽) 他

1回券料金 S ¥7,000 A ¥5,500 B ¥5,000 C ¥4,000
Gs(65歳以上)¥4,000 Ys(25歳以下)¥1,500

2024年
2月14日(水)
発売



PHOTO 1 11月6日～8日
文化庁巡回公演 第2クール
11月6日細田学園中学校、7日三芳町立三芳東
中学校、8日川口市立在家中学校に指揮阿部
未来さん、ソプラノ坂井田真実子さんと共に演
奏を届けました。コンサートマスターの木野雅
之とバシヤリ



PHOTO 2 11月18日さいたま定期、
11月19日杉並公会堂シリーズ
西本智美さんとともに重厚で美しいドヴォル
ジャクの音楽をお届けしました。堤剛さんが
奏でる豊かであたたかな音色にうっとり。西本
さん、堤さん、コンマス田野倉のスリーショット
をどうぞ



PHOTO 3 11月25日横浜定期演奏会、26日芸術シリーズ
首席指揮者カーチュン・ウォンとピアニスト福
間洸太郎さんの初の共演となったこの公演、ブ
ロコフィエフのピアノ協奏曲第3番やチャイコ
フスキーの交響曲第6番《悲愴》などをお届け
しました。



PHOTO 4 12月8日9日東京定期演奏会
首席指揮者カーチュン・ウォンとマリimbaの池
上英樹さんを迎えて伊福部昭のラウダ・コン
チェルタータ・シヨスタコヴィチの交響曲第5
番などをお届けしました。ラウダ・コンチェル
タータでは池上さんはまるで踊っているかのよ
うな躍動感!*



PHOTO 5 12月23日冬休みオーケストラ探検
例年3月に「春休み」オーケストラ探検としてお
送りしている公演の「冬休み」お引越し版。クリ
スマス・パーティへようこそ!をテーマにクリスマ
スの定番《くるみ割り人形》組曲を0才からお楽
しみいただきました。



PHOTO 6 12月16日～27日第九特別演奏会2023
2023年はようやく制限なく第九をお届けするこ
とができました。ありがとうございました。そし
て、今年もどうぞよろしくお願ひいたします!*

*印のアーカイブ配信はMember's TVU CHANNELで。
<https://members.tvuch.com>



あらゆる人々へ、あらゆる世代へ、 あらゆる地域へ、世界へ

福島県双葉町で、震災後初めての「被災地へ音楽を」公演

福島第一原子力発電所が立地する福島県双葉郡双葉町は、2011年3月の原発事故で自治体として唯一、県外に町役場ごと避難しました。当時、原子炉建屋の水素爆発が相次ぎ放射線量が上昇するなか、「原発から少しでも遠くへ」という切迫した状況下での県外避難でした。最初の爆発から1週間後、向かった先は210キロ離れた埼玉県。さいたま市の「さいたまスーパーアリーナ」から、更に3月末には加須市にある旧県立騎西高校に設置された町役場兼避難所へ移り、約1200人が集団で3年近く暮らしました。その間、各地の自治体が用意した空き公園住宅や震災後に整備された復興住宅等に入居するため、町民は福島県内のいわき市をはじめ、郡山市、南相馬市、茨城県つくば市に移住し、現在も町役場の支所が、加須市も含め各市に設置されています。

日本フィルは東日本大震災による「被災地に音楽を」の活動の一環で、2011年5月加須市に避難した双葉町の小中学生が編入した、加須市立騎西小学校と騎西中学校に、弦楽四重奏(小学校)、金管五重奏(中学校)で訪問コンサートを行いました。会場の体育館には保護者も引き、地元と双葉町の児童生徒と保護者が一緒に生の音楽を楽しみ、校歌も歌いました。

震災から11年後の2022年8月に帰還困難区域の一部の避難指示が解除され、住民の帰還が始まりましたが、現在も町の面積の85%は帰還困難区域に指定されており、居住人口を増やすための生活環境の整備や、町を離れて避難を続ける住民とのつながりをいかに保っていくかが、課題となっています。

そんな中、2023年11月11日、日本フィルの弦楽四重奏のメンバーは、震災後初めて常磐線双葉駅に降り立ちました。車で10分程の海岸までの道沿いには、震災伝承館と産業交流センターなどの他、工場等が点在しているものの、民家は数える程で、居住人口を増やすことの難しさを目の当たりにしました。翌12日、駅から車で5分程の「浅野燃糸株式会社双葉事業所」内にある、カフェに併設の広々としたラウンジで、「双葉ジャンプアップコンサート」と銘打たれた日本フィルの弦楽四重奏とスパリゾートハワイアンズのフラガール3人のコンサートが開催されました。第一部ではフラガールによるハワイアンダンスショーが華やかに繰り広げられ、第二部で日本フィルの弦楽四重奏の演奏と、福島県三春町出身のチェロの山田智樹の誠実な司会ぶりも喜ばれました。最後は日本フィルとフラガールが共演し、来場者が口ずさむ、会場が音楽と踊りで一つになった心温まるコンサートになりました。今回で「被災地に音楽を」は339回目となり、今後、双葉町でも息の長い活動の必要性を感じました。



▲加須市立騎西小学校での弦楽四重奏(2011年5月6日)



▲フラガールとの共演(2023年11月12日)